

日本を旅する
プレミアムに
会いに行こう

震災を転機に、
ハスカップが人気に

2018年9月6日午前3時7分、北海道胆振地方中東部をマグニチュード6.7、震度7の激震が襲いました。

ハスカップ栽培面積日本一の北海道厚真町は、震源に近く、土砂崩れの被害が甚大で、2人のハスカップ農家さんが亡くなられ、家やハスカップの木も土砂崩れで4分の1が被害に遭いだめになりました。ハスカップの実がつく成木になるには10年の歳月がかかることを思うと農家の皆さんのショックは想像がつかないほどです。

地震から2日後、予定していた札幌での物産展の担当者さんから連絡が来ました。「山口さん、出展は難しいですね?」と。この時、とっさにチャンスだと考えた私は、「大丈夫です。出展します」と、答えていました。もちろん、家族に猛反対されました。でも、反対されればされるほど、俄然やる気が出て、妻に「準備を手伝ってほしい」と懇願しました。

地震で散乱した家財を片づけながら、物産展の準備に奔走しました。物産展の搬入

の前日、隣町で水道が復旧したとの知らせを受け、キッチンカー仲間から仕込み場所を借りて、ハスカップスモーザーで使うソースをつくることができました。物産展では地震で被災したハスカップ農家が出展したとメディアで話題になり、全国各地の人々に厚真町のハスカップを知ってもらうことができました。

厚真町の魅力を発信

ハスカップの名前の由来はアイヌ語の「ハシカプ」:「枝の上にたくさんなるものを意味します」。

2003年、10年ほどのサラリーマン生活に終止符を打ち、アルバイトをしながら、入退院を繰り返していた父の代わりに農家を手伝い、2005年に100年以上続く農家の5代目として家族を背負い就農しました。生まれ育った厚真町を離れていたことでふるさと愛も高まり、ふるさとをもっと多くの人に知ってもらいたいと思うようになってきました。

1978年頃から、苫小牧東部に広がる勇払原野(ゆうこうげんや)の開発が行われ、自生していたハスカップを厚真町の農家が畑に移植し、ハスカップ栽培が始まりました。稲作や和牛飼育の傍ら、母も約1000本のハスカップを自分の畑に移植しました。

栽培してみると、ハスカップの木の実は、すごく酸っぱく、こんなに不味かったら売れるわけがないと考えた母は、当時、小学生だった私

ハスカップファーム山口農園
株式会社あつまみらい

ハスカップソース



- 1 山口善紀さんの背丈ぐらいに成長しているハスカップの果樹。
- 2 ハスカップづくりの顔として奮闘されている山口善紀さん。
- 3 6月下旬から収穫を迎えるハスカップの実。
- 4 地震で土砂に埋もれたハスカップ畑。
- 5 崩れた土砂を撤去し、ハスカップの苗木を植えた畑。
- 6 ハスカップの苗木。
- 7 左:あつまみらい ハスカップソース 甘さひかえめ(150g)。
右:あつまみらい ハスカップソース(150g)。
- 8 今も使われているキッチンカー(移動販売車)。
- 9 物産展などで人気のハスカップスモーザーとハスカップサンデー。
- 10 昨年収穫され、冷凍保存されているハスカップの実。

【お問い合わせ】 ハスカップカフェLabo

電話 0145-29-8168

<https://haskapcafe.thebase.in/>

ハスカップは、北海道に自生する果樹です。異なる種に少しずつ改良を繰り返して、親子2代で糖度12度を超えるスイーツとして成長させた農園長の山口善紀さんに、北海道名物として育て上げた足跡と、ハスカップ栽培面積日本一をめざした思いなどを伺いました。

と弟にハスカップの味見を命じました。「不味い木を見つけたら印をつけて、1本見つけたら100円のお小遣いをあげる!」と。そして母は食味の良いハスカップを選抜し、少しでも収穫しやすく実が大きくなるように剪定の仕方や栽培方法を工夫して、ハスカップづくりを続けました。そのようにして母が栽培したハスカップは私にとっても大きな財産だと気づき、ハスカップでふるさと厚真町の魅力を発信できると思い、貸していた田んぼをハスカップ畑に入れ替え、ハスカップの栽培に全身全霊を賭けました。

20種ほどに絞り込んだ品種の中で特に糖度の高いハスカップを、「あつまみらい」と「ゆうしげ」として品種登録し、2008年に厚真町のハスカップ栽培農家へ苗木の配布活動を開始しました。

ハスカップの栽培面積日本一へ

私が就農した当時、ハスカップの栽培農家は60軒ほどでしたが、苗木購入に対する助成を農協と厚真町が実施してくださり品質が良く糖度の高いハスカップを栽培してみたいという賛同者が増え、今では100軒

以上に増えました。

通常ならば、品種の権利を守るために増殖権利を無償で提供することはあり得ませんが、私は、それでは品質の高いハスカップが広がらないと考え、他の地域へ転売しないことを条件に、登録品種の自家増殖を認めました。

そうしたことで、2013年に厚真町はハスカップ栽培面積日本一(約28ha、東京ドーム約6個分)という名実を手に入れました。

農協や観光協会とも連携し、観光農園を始める、「すごく美味しい」とお客さんが喜んでくれましたので、ハスカップ農家としての自信もつきました。ハスカップの加工品にも力を入れ、2014年には6次産業事業認定を受けて、移動販売車でイベントに出向き、ハスカップソースを使ったクレープとスモーザーを販売しました。

地道に移動販売を続けた結果、ハスカップのPRに賛同してくださった方の後押しを受け、初めて札幌の物産展に出展が決まりました。札幌の物産展は、北海道胆振地方中東部地震の被災直後ではありましたが、母からハスカップの栽培を受け継ぎ、栽培面積日本一になった長年の努力の積み重ねを無に帰してはならないと奮闘しました。本当にたくさんの方々の応援のおかげで、全国の物産展に呼ばれ、ハスカップの美味しさを全国の人に伝えることができました。これからも、さらに美味しいハスカップづくりと、ハスカップの持つ効能を活かした商品にもチャレンジしていきたいと考えています。